

廣瀬淡窓とその世界

時代を先取りした淡窓の教育

原 千里

淡窓・咸宜園の教育には、封建制度に資することがない「開かれた性格」がある。さらに、その教育は組織的・系統的で、「明治以降の我が国の学校教育を予示、準備した」と言える。

第四代咸宜園主廣瀬林外がまとめた『学制ノ議』や淡窓の高弟長三洲が起草した『学制五篇』が、『学制』に取り入れられた。長三洲は、学制制定時の文部省高官。学制取調掛重要な役割を果たした。『学制』には淡窓の教育理念や手法が反映されている。

明治の学制の二大柱は①四民平等の教育理念②実学主義。フランスに学ぶまでもなく、咸宜園ですでに実践されていた。「年齢」「学歴」「身分」を無視して、全入門者を月旦評の無級においた。三奪法である。その後、試験で昇級。実力主義。平等主義。二人の女子も在塾。まさに四民平等の教育と言える。

実学を、淡窓はその著書『迂言』で「有用ノ学」と表し、その重要性を説いている。また『夜雨寮筆記』（巻二）でも「書ヲ読ムハ日用ノ為ナリ、吾ガ学問スルハ日用ニ供センガタメナリ」と述べている。

「今日の学校教育は、明治の教育とは無関係」とは言い切れない。第二次世界大戦敗戦後の新憲法下における『教育基本法』は、それまでとは違う。だが、教育には不易と流行の二面がある。時代がどう変わるうとも変わってはならないものと、時代の変化にともない変わって然るべきものがある。

淡窓が塾生を戒諭した『いろは歌』の一首に「鋭きも鈍きも共に捨てがたし 錐と槌とに使いわけなば」がある。この歌に、淡窓の画一主義を排した個性尊重の教育理念を読み取ることができる。こうした教育理念には、今も昔もない。普遍的真理。今日の学校教育においても、一層の輝きを放っている。一例をあげたまでにすぎない。

行き詰まりを見せる今日の学校教育。今一度、学びの原点として淡窓の教育に立ち返ってみよう。決して無駄ではない。